慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	支那古姓とトーテミズム(上)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1921
Jtitle	史学 Vol.1, No.1 (1921. 10) ,p.101- 112
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19211000-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

支那古姓とトーテミズム（上）

（一）トーテミズムの起源

トーテミズムとは一團の親族團體と自然的又は人爲的目的物との間に存する假詭的の親密なる關係を指稱するのである。その目的物を指して該團體のトーテムと呼び、主として動物又は植物からなつておる。トーテムと該團體の所屬者との間の關係は互惠的であつて、トーテムがその所屬者を保護するかはり、彼はそのトーテムが動物であつた場合には殺すことを忌み、植物であつた場合には伐採することを忌み、種々なる手段をもつてトーテムに對する尊敬を表しておる。

トーテミズムの起源に關しては從來樣々なる意見が提出されておる。その第一に擧ぐべきはハーバート、スペンサー及びロード、エーバリイのトーテミズムをもつて綽名の誤解に出づとなす說である。即ち或人を動物の名によつて呼びしに子孫に至り次第に誤解せられて祖先とその名の指し示す物とは同一視せられるに至つたのであると云ふ。フレーザーは此說に對しトーテミズムの如き重要なる習俗を單なる口頭の誤によつて解釋するのはあまりに簡單すぎる嫌ひがあると云つてゐる。

又アメリカの人種學者は、氏族トーテムをもつて祖先の守本尊でありとし、それが子孫に傳はつて、

遂に氏族のトーテムとなつたのであると說く。然してその守本尊とは、祖先が發情期の斷食等の儀式中夢又は妄覺によつて見たる動物又は植物なのである。然もフレーザーによれば此說は、アメリカ印度人には適合するも、オーストラリアや、印度や、アフリカの守本尊の習慣を有する事極めて稀なる土人に適用する事は、不可能である。

次にハッドンは、トーテムは、其地方に於ける特有の主要食料なる動植物であつて住民は、かゝる動植物をもつて自己の部落の需要を滿足させた後、その餘りを近所の部落と交換する。從つてその部落は、該動植物の名をもつて呼ばれるやうになる。かつ彼等は常に特殊の動植物を集め、又は狩するため、その動植物の性質を理解し尊敬するに至る。それ故かゝる動植物が自然その部落のトーテムとなると主張するのである。けれども中央オーストラリア土人の研究者ボールドウキン、スペンサーは、一部落の占領する地域が、おの〳〵特有な食用動植物を有すると云ふ事は、實際上見うけられない現象であると云つて之を否定しておる。

フレーザーは、中央オーストラリアのアルンタ種族の有するトーテミズムをもつて、トーテミズムの原始的形式に近きものなりとて、受胎が男女の交會によるものと信ぜられざりし時代に於て、女は、その胎動を感ぜし刹那目に映ぜし動物、植物、或ひはすぐ前に食せし動植物をもつて腹中に入りし靈魂なりと考へ、かくして生れし子と此等動植物とを同一視し、之をタブーせしめし習俗の次第に世襲的になりたるものが、トーテミズムであると說くのである。フレーザーの說は、トーテミズムに關する材料をもつて檢討し、その結果立言したる議論であつて從來試みられたる此種の議論中に於て、最も信ずべきも

のであることは疑をいれぬ。けれども最近ストレロウ氏の研究によれば中央オーストラリアのアルンタ種族の有するトーテミズムは、フレーザーの云ふ如く原始的のものならず、之と並行して普通の世襲トーテミズムも存在し、後者は前者に先立てるものの如くである。從つてフレーザーの假定は根柢より覆されることとなる。

オランダの人種學者ヴイルケンは、トーテミズムは、靈魂の轉生に基くとし、死者の靈魂が動物に轉生し、その動物は、子孫にとつて緣類となり、祖先となつて崇拜されるのであると說く。ヴントも、之と同意見であつて彼によれば、トーテムは靈魂の化身であり、祖先の靈魂或ひは守本尊の靈魂が、動物と結合しておると考へられしものである。そして植物トーテムとかチュリンガ(呪物)トーテムは、それから派生した現象であつて、トーテムは、本來動物であつたのである。然して今日世界各地に存する靈魂觀念を調べて見ると、死後人間の靈魂を受けいれうる物として考へられし物は、主として動物である。敏活な動作のもの、飛揚するもの、驚怖せしめるもの、薄氣味惡い感じを與へるものは、特に靈魂動物とみなされやすいのである。今日一般の信仰をみても、靈魂動物として數へられおるものは、鳥、蛇、蜥蜴の類である。然るにトーテム動物中最も普通なるものは、此等靈魂動物に外ならぬのである。オーストラリアに於ては、鷹、鳥、蜥蜴、アメリカに於ては、鷲、小鷹、隼、蛇が、最も普通のトーテムである。一體原人は、靈魂は、死後も身體に宿つておると考へてゐた。けれども種族移住の結果として生ずる絶えざる戰爭を經驗するに及び、彼等は戰死者の急激なる死の光景を見て、在來の身體魂の外に他の靈魂を有するに至つた。彼等は、靈魂は、流れ出づる血液と共に、その人を去ると信じ、血液をもつて

靈魂の宿る所と考へた。又烈しい鬪死の場合露出される內臟を見て、それが靈魂と密接な關係ありと考へた。又かやうな靈魂の急激な逸去の觀念は、戰死者から一般の死者にと移され、死者の斷末魔の氣息と共にその靈魂は、彼を去ると考へて來た。それ故靈魂は動くものとして、特に動物、鳥、蛇、蜥蜴として表象されてきたのである。此靈魂動物の觀念から、動物が、緣類と認められるトーテミズムの思想が發生したのである。以上がヴントのトーテミズム起源說である。

フレーザーは、ヴイルケンの說を反駁して左の如く述べておる。「人間の靈魂が、動物に轉生すると云ふ考は、トーテミズムを有せざる多くの種族によつて把持されておる。然るにトーテミズムの本場なるオーストラリア土人、又は中央アフリカのバガンダ種族、多くの北アメリカの印度人の間に見受けない。從つてトーテミズムと轉生の思想は、相異れるものである。もし轉生の思想が、トーテミズムの本源であつたならば、その思想は、吾人の知れるかぎり、最も原始的のトーテム種族なるオーストラリア土人の間に存しておる筈である。然るに何故にそが、彼等の間に於て、消滅し、その產物と想像せられるトーテミズムを殘し、却てトーテミズスの何物たるかを知らぬ高等種族の間に再現したのであらうか」と。

更に又佛國の社會學者デュルケイムは、ヴントの說の弱點を左の如く指摘してゐる、即ちヴントの假設を證明すべき材料は寡少である。ヴントは、爬蟲類が、最も共通なるトーテム動物なるが故に、もつとも原始的なトーテムなりといへど、オーストラリア、アメリカに於けるトーテムの名を一覽すると、或特種の動物が殊に多數であると云ふ事實を示さぬ。トーテムは、各地に於てその植物區系、動物區系

の異るに從つて、變遷する。もし最初トーテムとなるべきものの範圍が、限られておつたならば、二つの氏族又は副氏族が、必ず異りしトーテムを持たねばならぬと云ふトーテミズムの原理を如何にして滿足せしめ得べきであらうかと。

デュルケイム彼自身は、その「宗教生活の原始的形態」に於て、社會學上より見たる新說を提唱しておる。彼はトーテミズムを一種の宗教とみる。然も特殊な動物、人、又は徽號を崇敬する宗教に非ずしてこれらのものにあまねく存在する一種の力の宗教である。その力は、特殊の物よりはなれて存在し、個人は死し、時代は變らうとも、常にとゞまつて働いておるものである。この力を動物又は植物の種屬の形に於て認得したものがトーテムである。トーテムは、一面にこの力を象徵し、一面に於て氏族なる一定の社會を表すシンボルである。オーストラリアの土人は、一年のある期間は、獨立の集團に分れ、狩をしたり、漁をしたりして食物を集めてゐる。しかし或時期が來ると一定の場所に集合して、氏族を形成し、狂熱的な宗教的儀式をおこなふ。此等の氏族は、血緣關係によつて結ばれしものでもなく、同地域居住により結ばれしものでもない。共通なるトーテム徽號を有する點によつて結合されしものである。トーテム徽號は、この氏族團體のシンボルである。從つて個人の中にあつて個人を超越せる社會意識の表現である。この社會的意識が、その徽號を通じて各個人に命令するがため、此處に義務的觀念起り、ひいて宗教的尊敬の感情が喚起されてくる。此感情が徽號より眞實の動物植物に移され、ついで所屬員全體に及ぼされてくる。かくてトーテミズムは發生するのである。然らば何故に氏族が、動物植物をもつてその徽號としたかと云ふに、動物は記號たるに適する性質を持ち、狩獵者漁獵者たる氏族所屬

者の日常觸接せるものであるからである。

以上のデュルケイムの說は、トーテミズムの宗敎的社會的性質に着眼せし點に於て注意すべきであるが、その立論は、あまりに偏りすぎている。彼は兵士が一片の軍旗のため戰死する例をとつて、軍旗が團體の顯現なるによつて兵士に尊敬の念を起さしむる如く、トーテムは、氏族の顯現なるによつて崇敬の念を起さしむと云ふも、前者の場合に於て愛國の精神は、軍旗なる表徵に先立ち存在し、けして軍旗により導きだされたのではない。かやうな近代的な社會的事實をとつて原始的なトーテミズムと比較せしめるのは不適當ではなからうか。宗敎的感情の發生には、表徵は、第二次的のものであると思はれる。動植物が氏族の徵號となるまでには、動植物自身の魅力が、幾分働いてゐるのではなからうか。トーテムが、氏族の徵號たる點のみを過重する氏の意見は、トーテミズムの本質を闡明してゐないと思はれる。

トーテミズムの起源に關する學說を檢討してくると何れも充分なる滿足に價せぬ事がわかる。然らば吾人は、遂に此現象に對し概括的說明を與ふる事が不可能なのであらうか。思ふに各地各人種に於けるトーテミズムを全て同一のものと見て、之を綜合し、その成立原因を求むる企圖は、その出發點が誤つておりはしまいか。一步退いて吾人は、各地に於けるトーテミズムの狀態を研究し、その各々の特殊なる起源を考察すべきではなからうか。現在に於てはトーテミズムの成立起源に關し、各地のトーテミズムに一律に適應すべき法則を發見する事は不可能である。けれども吾人は、トーテミズムの發生すべき

大體の共通條件として左の三つを擧ぐる事が出來る。一は、その民族が、未開なる狩獵、漁業、農業を營みおる事である。未だ恒久的手段の本にその生業を營む程度に至らず、その農業の如き草の實、根を集めて食料となすが如き狀態にある場合である。二は、未だ神の觀念の發生せざる事である。神なる者は、信者に服從と奉仕を要求する。信者は、神に祈請し哀訴して、その援助を求める。然るにトーテミズムの發生すべき社會には、かゝる意味の宗教は存してゐない。族人は、宇宙を支配する神秘な力を彼等の魔術によつて如何やうにも制馭する事が出來ると信じておる。オーストラリアの土人の如き種々なる魔術の手段によつてトーテム動物及び植物の繁殖をはからんとしておるのである。第三には名と同名物との間に密接なる關係を認むる傾向の存在する事である。一體未開人は、名を見象的な實在的なものゝ、その個人の一部分であると考へておる。從つてその名を害すれば、其人に害を與へる事が出來ると信じておる。從つて支那人の如く字を使用して實名をはばかつたり、死人の名を忌んだりする習慣が生じてくる。又彼等にとつては名とその名の淵源となりて物との間に密接な關係ありと認められておる。左傳桓公六年の條に、申繻が、名のつけ方を說き、その中に「畜牲を以てせず、畜牲を以てすれば、則ち祀を廢す。」といひ、畜類の名を付ければ、その畜類を神に犧牲として供する事が出來なくなると云つたのも此思想から出づるのである。

かやうな三つの條件の存在する場合トーテミズムは成立するのである。トーテミズムの定義を、「動物植物その他の自然物をもつて社會を區劃し、然してその所屬員は、其物と己れを同一視する傾向である。」とするならば、上記の三條件から容易に之を說明する事が出來る。社會單位が、何故に動物植物其

他の自然物によつて自他を區劃するかと云へば、原始的な狩獵農業を營む場合、此等の物が彼等の死活を制する重要なる目的物であるからである。何故に彼等が此等の自然物と己を同一視するかと云へば、未開人は、名稱と同名物とを密接な關係あるものとみるからである。食料である動物植物の繁殖をもたらさむがため、彼等は、魔術的手段に訴へる。その手段には、類似の呪(Homeopathic or Imitative magic)と感染の呪(Contagious magic)とある。前者は術者が、自ら目的物と同一視され、其物の行爲を模擬し、よつてもつて希望する狀態をもたらさんとするものである。たとへば食料の繁殖を大ならしめんがため播殖と同等の價値を有する交接の力を假りるが如き場合である。後者は、目的物の一部にある手段を加へ、もつて希望を實現せんとするものである。例へば盜人を止めしめむがため足跡に釘をうつが如き場合である。類似の呪によつて食物を繁殖せしめんとする場合、その目的物と同一視せられし團體がその魔術の儀式を司る樣になつてくるのは極めて當然な次第である。かくしてオーストラリアの如くトーテム團體が重要なる食料繁殖の儀式を司つてくるのである。團員と同名物とを同一視する傾向も、かくその社會的要求により益々增加せられてくるのである。即ち吾人は、以上の三條件、その種族が未開なる狩獵、漁業、又は農業を營みおること、未だ神の觀念の發生せざること、名とその同名物との間に特殊の關係を認むる傾向の存することをもつてトーテミズム成立の必要條件なりとし、如何にしてトーテミズムの發生したるかといふ問題に概括的解答を與ふるには未だ躊躇する者である。

(二)　支那に於けるトーテミスムの存否

支那民族の間に果してトーテミズムが存在したであらうか。此疑問を解釋せんとするに吾人は、まづトーテミズム成立の三條件が支那に於て發見せられ得るやと云ふ問題に答へなければならぬ。まづ支那上代に於て未開なる狩獵、漁業、農業が主要生業を構成してゐる時代があつたであらうか。支那に現存する書物の中最も古代の作成と目せられる尙書盤庚の篇に既に農業に關する記事あり、支那に於ける農業の起源は、之を遠く有史以前に求めねばならぬ事が定論になつてゐる。たゞ殷が度々都を遷せし傳への存在する事が、支那民族が當時遊牧民族なりし事を推察せしむるのであるが、一面に於て北支那に於て黃河の水害の屢々人民を苦めしこと、並びに古代農業が大森林を燒きはらひ、その跡に穀物を栽培し、地味やせし時は、他所に移轉すると云ふ組織なりし事が都の遷移を促せしなるべく必ずしも遊牧時代の根迹と認めることは出來ない。殷墟より發掘せられる龜甲牛骨文字の研究によれば、當時支那の中原には大森林の存せしこと、虎、豹、象、鹿等の野獸多く棲息し、狩獵の屢々行はれしことが推斷せられ得る。從つて此大森林の中にさまよつて古代支那民族が狩獵をもつてその生業となせし時代も遠き以前に於て存せし事は云ふまでもない。然しながら文獻の存する時代に於ては彼等は、主として農業を生業としておつたのである。トーテミズムの發生すべき狩獵漁業時代は既に遠き過去の夢と化しておつた。又彼等の間には既に神の觀念が發生してゐた。殊に農業民として天及び地の崇拜は、彼等の間に最も勢力を有しておつたのである。自然力を人力によつて左右せんとする魔術の觀念は、その文化の各方面に於てなほ根迹を止めてゐたが、大體に於て自然神の信仰が、古き思想を驅逐しつゝあつたのである。又名と同名物の間に親緣を認むる傾向は、上代支那人の間になほ勢力を振つてゐたが、彼等は、自

己の個人名と其同名物とを同一視せしまでにて、家族の名、即ち氏に對してはかゝる觀念を有しておらなかつた。論語盡心篇に、「諱レ名不レ諱レ姓、姓所レ同也、名所レ獨也。」とあり、姓に對してはタブーの觀念を及ぼさなかつたのである。楚王の氏は熊氏なるも、成王は、將に弑せられんとして、熊蹯を食ひ後死せん事を請ひ、華元の御なる羊斟は、主人が、羊を殺し、士に食はしめて、己に與へざるを怒り、主人に裏切り、敵軍中に馳せ入つておる。何れもその氏と同名物なる熊、羊を食するを忌まざりし證據である。

以上の如く當時の支那に於てはトーテミズムの成立すべき三條件は發見する事不可能なのである。從つて支那にはトーテミズムが存在しておらぬと云はねばならぬ。しかしながらよし當時の支那に存在せずとはいへ、遠き過去に於て存在しなかつたと推論することは出來ない。從つて當時の社會に前代の制度の名殘りとして存せる姓、並びにそれに關聯せる諸傳說を通じ、トーテミズムの根迹を求むる企てはなほ許容されねばならない。

支那に於けるトーテミズムの存否に就ては從來多くの學者の研究が發表されておる。ド、フロート氏は、その「The Religious System of China」に於て支那本土には動物祖先の信仰無し、支那の部族の名の中には、熊氏、馬氏、牛氏、烏氏、燕氏等あれど、その最初の二者は、祖の個人名より出で、馬氏は、その祖の字の初文字に外ならず、牛氏も然り、烏氏は、祖先の官名又は官の徽號を表し、燕氏は、本來支那北方の一國家の名である。動物崇拜は、支那宗敎の一特色なれども動物が部族の祖先として崇拜さ

れし形迹はなく、トーテミズムの存在は疑はざるべからずと論じてゐる。

又支那學者なるベルトルド、ラウフェル氏は、「印度支那人種に於けるトーテミズムの根迹」なる題下に於て、上部東京地方に於ける黒タイ、南雲南に於けるロ、、貴州省に於けるヘイミャウ、支那安南國境地方なるマン、福建省のシャ、古代南詔の哀牢夷、甘肅省の羌、黨項人種等の間に於けるトーテミズムの根迹を論じ、最後に支那人種の間にも動物又は植物の名が父系氏族の名稱となれる例多き事をあげ、その古くより發達せる儒教主義のため古代の原始習俗を解明する事困難なるも此問題に就て將來研究の餘地なほ廣き事を論じてゐる。(The Jonurnal of American Folkdore vol. xxx. 1917)

日本に於て此問題を取扱ひたるは遠藤隆吉氏にして氏はその著「社會力」に於て、姓その者は母系の團體を意味し、從つてそのトーテムを意味することは種々なる點より之を想像することを得とて、支那の姓の中動植物自然物に關するものを例示してゐる。又田崎仁義氏もその社會學院年報所載「トーテミズムの起源及び支那太古に於ける此制度の存否」に於て、フレーザーに從ひ、姓娠トーテミズムをもつてトーテミズムの起源なりと認め、支那に於て感生傳說の少からず存せしこと、天子が天の子として天とおのれを同一視し、天を崇拜する習慣の存すること、祭祀會盟の場合犧牲として牛を屠ること等をトーテミズムの根迹なりと認めてゐる。然しながら氏は、姓が多く母の居住地の名をとりしをもつて未だトーテミズムの遺意を寓するものと斷定するにたらずと述べてゐる。最近城戸幡太郎氏も心理研究所載「トーテミズム成立の條件について」に於てトーテミズム氏族は、一個の職掌を表はす團體なりといふ立場より支那に於て之に妥當するものは姓に非ずしてむしろ氏なり、姬、姜、嬴、姒、嬀等の姓は何等ト

ーテムの意味を有せず、姓は多く居住の場所である。嚴密の意味に於て支那にはトーテミズムは存しないと論じておる。

以上の諸研究は何れも支那古典の取扱ひ方法が誤つておる。從つて姓に關する後世の傳說を古代のものの如く考へ、又は支那人の常に傳會する古への聖天子をもつて實在人の如く考へ、ために姓と氏との區別が判然としておらぬ。全體姓と氏は何れも古代支那人の血族團體の名稱であるが、姓は最も古きものであつてその起源は、傳說時代の中に包まれておる。然るに氏は歷史時代にもなほ發生しつゝあるものであつて大體に於て姓より分派したるもの、姓より後に生ぜしものと認めることが出來る。それ故もしトーテミズムの根迹を探らむとすればまづ原始的團體なる姓の性質を研究しなければならない。

（此項完）

松本信廣